

## 2019 年度 センター試験 世界史 B (本試験) ワンポイント解説

第1問	問 4	③について。大院君は鎖国政策をとり、米・仏や日本の開国要求を拒絶していたので、これは誤文である。日朝修好条規で開国したのは、大院君を失脚させて成立した閔氏政権なので注意しよう。
	問 7	④について。ポーランドの反乱や暴動の起点には要注意。反ソ暴動の最初はポズナニからだったのでこれは正文だが、1830 年のニコライ1世に対する反ロシア反乱(蜂起)の始まりはワルシャワだった。こうした違いはきちんと整理しておこう。
	問 9	①について。イヴァン 3 世はツァーリの称号を用い始めたが、正式にこの称号を採用したのはイヴァン 4 世なので、少し迷わされる文である。しかし一国社会主義はレーニンではなくスターリンの主張なので②が明らかに誤文であるから、解答としては②を選ばなければならない。
第2問	問 1	②について。フランドル地方はイングランド(イギリス)産の羊毛を輸入し、毛織物に加工して輸出していたのでこれは正文だが、このような各範囲での経済上のつながりは重要なポイントなので、しっかりと理解を進めておきたい。
	問 3	③について。バイユーの刺繍画(タペストリ)という意表を突いた語句があるが、これに惑わされてはいけない。歴史上イングランドの征服はクヌートやノルマンディー公ウィリアムすなわちノルマン人がおこなったことなので、これは誤文。マジヤール人については、ドイツ東南部や北イタリアへの侵入→レヒフェルトの戦いという流れや、ハンガリー王国建国後はドナウ川の中・下流域を支配したことを想起しよう。
	問 7	④について。ヴィジャヤナガル王国が大量の馬を輸出という、あまりにも意外なポイントに戸惑ってしまうが、馬の産地はアラビア半島やモンゴル高原などであり、非常に疑わしい文である。しかし③がはっきりとした正文なので、比較したうえでこちらを選択できなければならない。
第3問	問 3	グラフはドイツとカナダからのイギリスの輸入額を表している。また 1932 年にはオタワ連邦会議でイギリスのブロック経済であるスターリング＝ブロックが成立したことに注目しよう。このブロック経済ができると、ブロック外のドイツとの貿易は関税障壁で激減すると考えられるので、bはドイツと判断できる。逆にブロック内のカナダとイギリスの貿易は自由貿易により増加するはずだから、aはカナダのはず。このように冷静に考えていくと、決して難解な問題ではない。
	問 7	②について。巡礼の旅というポイントがやや細かいのだが、イブン＝バットウータの旅はメッカ巡礼から始まっているので、これは誤文ではない。一方、サンティアゴ＝デ＝コンポステラへの巡礼熱の高まりは十字軍の時期であるから①は誤文。ピルグリム＝ファーザーズはピューリタンでありカトリックではないので③は誤文。マンサ＝ムーサはソングアイ王国ではなくマリ王国の王なので④も誤文。このように消去法で解いてもよい。
第4問	問 1	①について。当時のアケメネス朝ペルシアは、ギリシア世界の統合と諸ポリス連合軍のペルシア侵攻を密かに怖れており、アテネがデロス同盟を通じてギリシア世界を統一しようとしていると勘違いしたためスパルタを支援した。そのためこれは正文である。またペロポネソス戦争終結後も、ギリシア各地の内戦が長引くように暗躍していたこともできれば押さえておこう。
	問 7	bについて。インカ帝国の“インカ”の名は、太陽の化身としての皇帝の呼称であった。したがってこれは正文である。なおインカ帝国については、文字を持たずキープ(結縄)により数を表していたことや、エクアドル・ペルー・ボリビアにまたがる大帝國を形成していたこと、また非常に高度な石造建築技術によりマチュ＝ピチュの都市遺跡を残したことなども重要である。